訪れたいまち、羽曳野（はびきの）

～ 住みたい 住み続けたいまちへ ～

「羽曳野」の魅力を みなさんは
どれだけ知っていますか。
普段 当たり前にあるものが
すごく “特別” なものかもしれません。
人と人の交流が それに気づかせてくれます。

北川 嗣雄 Kitagawa tsuguo
羽曳野市長

羽曳野で観光って、どうなん？

■**北川：**過去、羽曳野とは縁遠いものだと考えられていた「観光」産業ですが、やはり、より多くの方に羽曳野を知り、訪れていただきたいと本市では平成 24 年度より、観光分野施策の強化を始めました。まず、地域資源をどう活かすかを考え、キーワードとして浮かんだのが “賑わい”。そこで、大阪府内の市町村では初の試みである「軽トラ市」を開始するに至りました。当初より約 60 台の登録をいただき、現在も年間 12 回ほどのスケジュールで市内各地で出店してもらっています。

こうして軽トラ市で創ることのできた “賑わい” に、更に地域の観光資源を活かすことができないかと、今は頭をひねっています。例えば、竹内街道を起点にして、古墳や神社仏閣、その地にまつわる伝説など、土地土地の特色を楽しめるようなイベントができるのではないかと考えているところです。

特に、観光資源という面では、駒ヶ谷や飛鳥のような地域は大変珍しく貴重で、山の斜面に広がるぶどう畑に、歴史ある建造物、また伝統的な提灯まつりも行われ、なんとも風情のあるまち並みです。しかし一方で、そこはまた住民のごく当たり前の生活の場でもあります。本日は産官学それぞれのお立場から「観光」をテーマにお話を伺いたいと思います。

吉川先生の専門である**景観計画・都市計画の視点から観光資源の活かし方など、どうお考えになりますか。**

住民の生活と古墳との共存

■**吉川：**軽トラ市は住民が楽しみながら賑わいを創る仕組みなので、素晴らしい取組みをされていると思います。

観光振興は、住民が犠牲になることがあっては実現できません。景観資源は観光資源とほぼイコールです。つまり、住民が “幸せ” になるまちづくりを行うことと観光を発展させることは表裏一体とも言えるんです。古市古墳群のような、まち中のあちこちに古墳が点在している地域では、一大観光地とはアプローチの仕方が違い、スポット型ではなくツーリズム型の観光客をターゲットにすべきで

◆◆対談者紹介◆◆

■吉川 耕司
Yoshikawa koji
大阪産業大学
人間環境学部 生活環境学科 教授

■森嶋 俊行
Morishima toshiyuki
四天王寺大学
人文社会学部 日本学科 講師

■上林 寛和
Kanbayashi hirokazu
近畿日本鉄道株式会社
鉄道本部 企画統括部 観光・宣伝部長

■阪口 寿子
Sakaguchi hisako
公益財団法人大阪観光局
魅力創造部地域素材開発担当部長

■松村 尚子
Matsumura naoko
羽曳野市議会
議長

す。彼らは「まちを味わう」のです。“観光”と“より良いまちづくり”を結びつけていくことが重要だと。

ぶどう、いちじく、ワインが作られ、竹内街道が通る環境の中で生活していることそのもの、それを見た観光客に「良いまちだな」と思ってもらえることが観光のPRポイント。

■北川：森嶋先生は、市民大学で「観光と日本文化」に関する講義もしていただいていますが、**歴史資産の「保全と活用」また、地域の暮らしへの影響についてなど、お考えをお聞かせください。**

生活を良くするための遺産保護

■森嶋：長年大阪のベッドタウンとして発展してきたこの地域を観光化すると言っても、大型バスがひっきりなしに乗り付けるようなことは現実的には考えにくいです。

この辺りは、周辺の古墳の緑や遠くの山並みなどの景色がとても綺麗で、それらが各家庭の窓を開ければ眺めることができる環境。例えば、これらの景観を整備するような形の“遺産保護”を行うことは、住民の生活の向上につながり、更には良いまちづくりへとつながるのではないのかなと。

こうしたものが近くにあることによって、この環境が好きで、ここに住み続けたい、と思う人は必ずいるはずで、そんな人たちにとって住みよいまちにするためには、具体的にどうするかは、自分も含め、これから考えていかなければならないですね。

■北川：観光特急「青の交響曲（シンフォニー）」を手がけられた上林さんは、随分南河内には詳しいと思うのですが、**南河内の魅力をどう活かしていったらいいのかなど、アドバイスをいただけますか。**

観光は幸せ産業

■上林：南河内は掛け値なしに良いところだと思います。まず大阪市内から30分で来られますし、日本でも有数のワイナリーがある。古墳群がある、自然環境もあります。大阪市内の方でもこの地域を訪問したことのない方は多いですが、情報を提供して、「良いところ」ということが伝われば、人は訪れます。これまで「観光」は自治体の業務ではないとの考え方が一般的でしたが、今後は市や地元の方々が一体となって観光振興に取り組む時代だと思います。

近鉄グループの旅行会社の幹部から、「観光は幸せ産業」と聞いたことがあります。来訪者は美しい景観を楽しみ、郷土料理を味わい、想い出を持ち帰る。地域は観光客の消費によって経済が活性化し、雇用が創出される。まさに関係者の全員がハッピーとなるのが観光です。そうした「観光による地域の活性化」を近鉄としてもお手伝いしていきたい、と考えているところです。

羽曳野市の魅力としては、このほかに「南河内」という文化圏の一員である、という点にあるのではと思います。寺内町がある富田林市や、聖徳太子ゆかりの太子町と観光面で連携できる、文化的なつながりも大きな魅力のひとつではないかと考えています。

■北川：阪口さんは大阪観光局で、大阪ミュージアム構想など色々施策を出されて、展開をされて、大阪にも非常に大勢海外からの観光客も来られてます。そういった視点から、**「南河内の観光」に関してどのようにお考えですか。**

観光は地域の成長戦略

■阪口：最近は来られる方のニーズが変わってきています。地域の雰囲気を味わうなど、地域の人々にとっては日常のことを外から体験しに来たり、斬新だったりするようです。大阪市内でも中崎町や

竹内街道に沿って、南河内と奈良を結ぶ近鉄南大阪線

空堀界隈のまち並みに台湾などの観光客が多く足を運んでいます。堅苦しく考えなくても、いろいろなことが観光資源になり得ます。

地域の関わる方、お店、鉄道、広告会社、様々な産業の方が含まれるので、観光は今、地域の成長戦略と言われています。大阪市内に集中する観光客の方を、できるだけ府内の魅力ある地域に誘導したいと思っています。

羽曳野市では竹内街道の野や駒ヶ谷地区が平成25年にミュージアム・街の魅力づくりで整備されていますが、今後、持続していくためにも府内地域のネットワーク作りなども考えているところです。

今の好況をいかに継続させるかがこれからの課題であり、そのためにはリピーターの確保が重要なカギになります。地域に潜在する魅力を掘り起こし、誘客や滞在促進を図りたいと考えています。

■北川：松村議長はお生まれは堺とのことですが、羽曳野も長いので魅力もよくわかっていらっしゃると思います。そんな**羽曳野の魅力を発信するために、必要なことは何だと思われますか。**

一人ひとりが営業マン

■松村：私は歴史資源や特産物を大きな魅力と感じていますが、観光となるとそこに住む私たちと訪れる方との間にはギャップが生じます。そのためには、まずターゲット毎の観光資源をルート化し、ファムトリップ（下見招待旅行）などにより、訪れる人のニーズを検証することが必要と考えます。

国も広域的な取組みを推奨していますし、広域的なツーリズムを組み立てることで、国の補助金を有利に使うこともできるのではないかと思います。

何より重要なことは、誰もが羽曳野の魅力を外に発信できるよう、まちの良さを知る必要があります。子どもたちにも「はびきの学」的な学習を実施し、市民一人ひとりが営業マンとして羽曳野を『宣伝』できればと願っています。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

■北川：みなさんのお話を伺って、生活から観光、生業をどう活かしていくのか。ぶどう、ワイン、まち並みなど**羽曳野の魅力をどんな形で具体的に作り出して、発信していくのか。それぞれご提言・ご助言ください。**

■吉川：先ほどから見ている羽曳野の古墳の点在する地図、こんなコンテンツになる市域図は他ではありえない。これを絵として売り出すのは思いのほかインパクトが強いと思います。あと、ベンチがあるとないとでは全然違う。来訪者が何もないところで立っていると、近隣の方は違和感を抱くが、ベンチに座っていたら、ツーリズムで回ってはるんやとわかる。地元住民も座れるし、交流できる。ベンチなら3㎡くらいの土地があれば設置できるかなと。

歴史遺産という限りでは、昔の人の取組みにしか過ぎず、住民に主体性がない。ところが実は、近代土木遺産として歴史街道が候補にあがっているんです。古代にできた道を守っている近代人の試みを評価しようとしている。祖父母の時代から今に至るまで、我らがずっと守ってきたということを誇りに思って良いし、そんな捉え方があることも、市民のみなさんに知ってもらうことが重要ですね。

古市古墳群

■森嶋：皆さんの話を聞いて、自分が思っていたより、この地域は多様であることがわかってきました。東高野街道や竹内街道のかなり古いまち並みは、実際に歩いてみてびっくりしました。普通の路地に、築100年以上するような建物が並んでいる。羽曳野市内の人と人との関わりあいの話、市民の方々はこれらをどれだけ知っているのかなと思います。

私は産業遺産を研究していますが、産業観光というジャンルの一つで、ワイナリーの話なんかで、ワインの全体の過程が見られるようになるというのは興味深

▶上ノ太子駅前の「道標」街道に沿って、市内に点在。

▲▶羽曳野市内を走る最古の官道「竹内街道」
◀「てくてく羽曳野」羽曳野初のガイドマップ（2016年3月発行）

いこと。地形がぶどうに向いているのはなぜか、から始まり、創業者の苦労や、完成品を誰が飲むか、などがわかるといいなと。個別のワイナリーでやるのか、協力して地域でやるのか。どちらにしてもおもしろいと思います。

■**上林：**羽曳野市や南河内ですと、やはり大阪市内からの日帰り観光かと思います。観光コースとしては羽曳野市に加え富田林市、河内長野市、堺市などを巡るのがよいのではないでしょうか。

羽曳野市の強みはやはり地ワインとぶどう畑かと思います。一方、古墳は観光客にどのように観ていただくかが課題と考えます。高所から見下ろすのが一番よく見えるのでしょうが。ビューポイントがあればと思いますね。

■**阪口：**過去に、宅地開発などで壊されたりしている歴史遺産も多い中、堺から羽曳野、藤井寺でこれだけの古墳群が今も残っていることはすごいと思う。看板や案内板がベンチと一緒にあると、見た人それぞれの空想も膨らむ。住民の再認識にもつながる。竹内街道にしても、ストーリーにあわせてエリアで組み合わせて連携するなど。例えば、峠を越えるということなら、太子町、葛城市など。テーマを作ってやってみるのもいいと思います。

いかに知ってもらうかが一番重要なので観光局でも効果的な情報発信に努めています。当局のSNSなど、どんどん活用していただければと思います。

■**松村：**私たちは、自然のめぐみで育てられた果物や野菜、食肉など、羽曳野だからこそ味わえる食べ物に囲まれています。でも、これは当たり前のことではないんですよね。訪れる人に、その素晴らしさを知ってもらうため、それらに付加価値をつけながらブランド化させ、羽曳野の名を高めることも必要です。

訪れた人に、「住んでみたいなぁ」と思ってもらえるような魅力の発信が人口減少対策にも繋がり、羽曳野が賑わい、まちに活気が甦ると考えます。

■**北川：**本市では、交流人口の増加と地域経済の持続的発展をテーマに、昨年11月、観光プロモート戦略研究会を立ち上げました。本市の市政施行60周年を迎える平成30年度を目標に、今ある軽トラ市、駒ヶ谷地域、竹内街道、ぶどう、

▲タッチパネルでスポット検索が可能　▲つぶたんと遭遇！記念に1枚。

ワインを1つのテーマに結んで、1年を通してシリーズで取り組むことで、「羽曳野に行けばいつもこれがある！」というものにしていきたいし、それが実現できると思っています。3つのワイナリーを巡るワインウォークなどをぜひやりたいですね。

今日ご提言いただいたお話を具体的な施策に活かしていきたいと思います。

本日はありがとうございました。

～ いろんな羽曳野産（もん）いかがですか ～

▲羽曳野産のワイン。3つのワイナリーそれぞれの良さをお楽しみください。（社名左から）仲村わいん工房、飛鳥ワイン株式会社、河内ワイン

▼6月～8月初旬まで楽しめるデラウェアは「ぶどう狩り」で堪能

▲美容・健康に◎。木を見て「いちじく」とわかるのは、羽曳野市民の証拠。